美術作品における読解力を身につける授業の実践
中学校３年生の選択美術の授業事例

牧原　竜浩

美術において基礎とは何か。美術作品の鑑賞と表現の中で何が重要なのだろうか考えてみた。鑑賞するときには、その作品の制作者の考え方、時代背景、表現様式、表現技術などの知識が必要だろう。そして、表現する上では想像力、構成力、表現技術などが必要になる。多くの生徒たちは、表現するとき、何をどう表現するかで考え込んでしまい、そこから展開していくことが難しいという現実がある。では想像力を身につけるためには、何をすればいいのか。美術作品を制作するときには芸術家はいったい何を考えているのか。そういったことを学んでいきながら、美術作品を読み取る力を養っていき、想像力を膨らませ、生徒自身の作品制作にも生かしていきたい。そして、芸術とは何か。といった根本的な問題まで迫っていきたいと考えている。

１．レオナルド＝ダ＝ヴィンチに挑戦

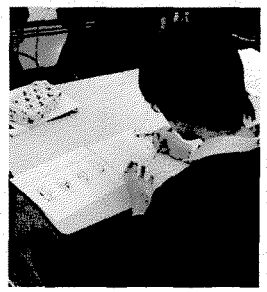
まず最初に、レオナルド＝ダ＝ヴィンチとピカソという天才と言われた二人の芸術家の生涯を知り、それぞれの時代背景や表現方法、制作についての考え方を学んでいくことにした。

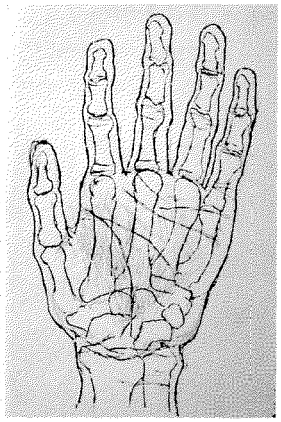
15世紀、イタリアルネサンスの代表的な画家、レオナルド＝ダ＝ヴィンチは、万能の天才といわれている。それは絵画だけではなく、医学、哲学、軍事、工業技術にも優れた才能を発揮しており、絵画技術においては、師匠であるヴェロッキオとの合作「キリストの洗礼」で、若くして、師匠を超えた技術を持っていた。

遠近法やスフマート技法（ぼかし）、解剖学を駆使し、これまでの中世の絵画表現よりも、優美で現実性のある表現になっている。レオナルドの人物画においては、特に人体解剖学の研究が、リアリティーある表現を可能なものとしている。

そこで、人物画を描くとき、その表面の皮膚のかたちだけを観察して描くよりも、解剖学的に観察すると、より現実的な表現ができるのではないだろうか。つまり、人間の骨格から筋肉のつき方、そして、その上に皮膚が覆いかぶさる。そういった人体の構造を把握し、それを感じながら描いていけば、レオナルドの実践した研究に近づくことができるのではないかと思った。

生徒たちに実践してもらったことは、自分の手をモチーフとして、鉛筆でデッサンしてもらう。そのとき、考えてもらいたいことは、手の骨格と筋肉のつき方を意識すること。その資料には、J・シェパード著の解剖図を用いた。これは、骨格図から皮膚の表面図まで、4枚の図で説明されており、骨から筋肉がつき、皮膚にいたるまでの構造を把握しやすくなっている。それらを参考にしながら、自分の手を観察しデッサンしていくわけであるが、一つ一つの骨の長さや形、関節の数を数えたりしながら描いていくため、描いていく時間よりも、観察するという行為の時間の方が自然と長くなっていく。このことは、制作する上では非常に大切なことであり、レオナルドの研究したやり方に近いため、より現実的な表現になっていくことであろう。





生徒作品の一例

上の図は生徒作品の一例を表示したものである。この生徒は、特に骨格、骨の形を意識的に表現した上で、手の輪郭やシワなどを描写しており、それぞれの骨の形にあわせた皮膚の輪郭が、非常にリアルに表現されている。特に親指から手首にかけてのラインが、非常に豊かで人間らしい自然な動きになっていることがわかる。それぞれの指の長さにも注意し、指の間に僅かにできたシワまで克明に描写しようと努力している。

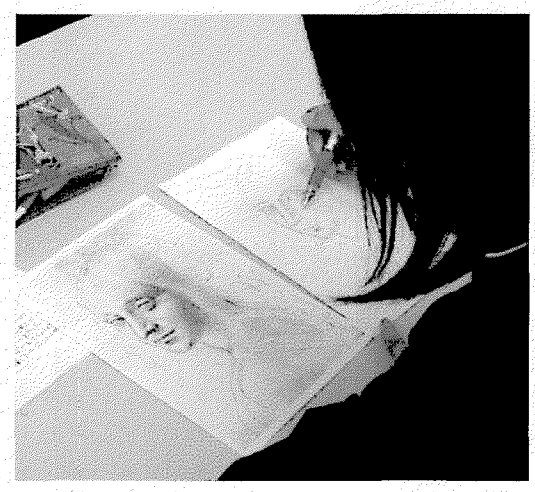
デッサンとしての立体感や質感表現までには至らないかもしれないが、モノの見方、観察力を養うには役に立

つことだろうと考えられる。デッサンにおいて、モノを見るとき、ただ単に表面の現象をたどっていくだけでは、本質的な形態を表したことにはならない。そのモノを凝視すること、構造的に見ること、目に見えている部分だけではなく、その奥の見えていないところまでを把握することで初めてそのモノの本質的な形態を表現することが可能になるのではないか。

次に、レオナルドの人物のスケッチを模写していくことにした。これは、スケッチの模写であるため、実際のペンの動きに合わせながら、その強弱まで模倣することが可能である。

レオナルドのスケッチは、左上から右下に引いた線の蓄積によって描かれているという特徴がある。このことから、左利きであったということが推測ができる。もう一つの特徴は、ある部分は立体的に密度のある描写がされているが、一方では最小限の線のみで描かれた部分もあることが挙げられる。これは、レオナルドが最も表現したい部分だけに力を入れ、そうでない部分には、細かい描写をしないままにしておく。例えば、顔の表情を表したい時には、顔の部分だけを描写して、他の髪の毛や肩のラインなどは、最小限の線、あるいは、薄い描写だけにとどめている。

こういった分析をふまえて、実際に模写の作業に移る。先ず、一番細かく描写してある部分から描き始める。そこが最も表したかった部分であるため、その部分だけはしっかりと描写しておかなければならない。極端な言い方をすると、その部分を描くだけで良いことになるかもしれないが、形のつながりを意識した線があれば、全体の様子がイメージできるため、最小限の線でも構わないが、説明するような線は必要だろう。



制作風景

人物の顔の表情のスケッチや手を構成したスケッチなど、他にも数枚の模写を試みたが、どの作品も、そのまま額に入れて飾れるほどの出来であった。

2．ピカソに挑戦

レオナルドの時と同様に、スペインの芸術家パブロ＝ピカソについて学ぶ。

１８８１年にスペインで生まれたピカソは、少年時代から、写実的なデッサンを描いていた。初期の油絵作品は、実際の情景をそのまま描いており、現実的な表現なっている。そして、パリへ移り生活し始めると、周囲の貧しい生活を目にし、作品も青を貴重とした、暗いイメージの作品を描くようになる（青の時代)。そして、人々の愛情や幸福を感じ取るようになると、赤を貴重とした明るいイメージの作品を描くように変化していった（バラ色の時代）。ここまでは、写実的ともいえる具象表現であったが、アフリカの仮面の斬新さに惹かれ、影響を受けて制作した「アヴィニョンの娘たち」から、その表現方法は大きく変化した。一つの画面の中に、複数の視点から見た状態を描いていくという、キュビズム（立体主義）と呼ばれる表現にいきついた。ピカソの考え方は、描く対象物を画面の中で、破壊し分解していき、それを再構成させる。この破壊と構築の繰り返しによって、より複雑で豊かな画面に仕上がっていく。

ここで、表現技法を実践していくのであるが、キュビズムの考え方を簡単に言うと、例えば、人の顔を描こうとするとき、正面から見た顔と、側面から見た顔、これを同じ画面の中に組み合わせて描くということである。破壊行為によって生まれた分解されたモチーフのかけらたちを、再び、同じ画面の中で構築していく。これは、なかなか理解され難い表現であるため、生徒たちが実践するには、難しいであろうと予測された。

実践にあたって、モチーフ設定したのは、レオナルドの作品「モナリザ」である。モナリザの顔を目鼻口などを、それぞれ思い思いに分解し、多視点をイメージしながら再構成していった。最初は「難しい」という声があがっていたが、作業が進むにつれて、キュビズムらしい作品になったり、顔のパーツがばらばらになり、滑稽な表情に仕上がったりして、結果的には、生徒それぞれの分解行為によって、個性的で興味深い作品が多く誕生した。

そして、何よりこの実践を通じて、ピカソの作品の奥深さを身を持って体験し、難しすぎて比較的敬遠されがちな現代美術に興味を持って接していくことが可能になったのではないかと思っている。

３．名画を読み解く

レオナルド＝ダ＝ヴィンチとピカソ、それぞれの時代背景や表現技法を実践を踏まえて学習していったところで、作品を鑑賞しながら、作者の作品に対する思いを読み取っていくことにする。レオナルドでは「モナリザ」、ピカソでは「ゲルニカ」をとりあげた。

「モナリザ」は、現在パリのルーブル美術館に所蔵されているが、制作された当時のことは明らかにされておらず、謎の多い作品としても有名である。フィレンツェの女性を神秘的な山岳風景をバックにして描いたこの肖像は、肖像画の最高峰とされている。レオナルドは、この絵に「生命を吹き込もう」努力した。絵は黒ずみ、ひび割れ、汚れとワニスの層で覆われている。これは、損傷の恐れがあるため修繕はされない。しかしながら、スフマート技法を使ったレオナルドの底知れない技量を今なお感じ取ることが出来る。このスフマート技法というのは、グラッシという透明な顔料を塗り重ねることで、明部から暗部への移行部を微妙にぼかす技法で、人物は目障りな線や輪郭を使わなくても、ソフトに浮き上がってくる。この絵は、１５０３年から１５０６年の間に描かれたとされているが、今では、制作年を１５１４年頃とする学者もいる。理由は不明のままではあるが、レオナルドはこの肖像画を依頼主に渡さず、フランスに運んで、死ぬまで手放さなかったといわれている。この絵画の由来についての詳細は、今もって謎のままではあるが、その魅力は普遍的で、今もなお人を強くひきつける。

以上のような作品についての情報から、想像力を働かせて、生徒自身が「モナリザ」を描いた理由を自由に思い浮かべていった。以下、生徒が書いた文章。

＊ モナリザは、これを描いているレオナルドに対して微笑んでいるのかもしれない。しかし、自分でこの絵をずっと見ていると「微笑み」のプラス的な要素だけでなく「悲しみ」などのようなマイナス的な印象も受けた。もしかしたら何かを悲しんでいるのだろうか。

＊ モナリザの、あの何ともいえない微笑みは、まるで天使のようでレオナルドの女性に対する理想像が表現されているのではないかと思う。

＊ 滑らかでやわらかい曲線で描かれているにもかかわらず、全体の印象としては暗いものを感じさせる。モナリザの笑顔も、目は笑っていない。そしてどこか寂しさを感じさせる。これは、レオナルドの心の中に潜む闇とか寂しさというようなものを表しているのだと思う。

＊ 一人の人間をこうまで手をかけて丁寧に描いているのだから、レオナルドはこのモデルの女性のことがすごく好きだったのではないかと思う。もしくは、この絵自体が好きだったのかもしれない。でも何で眉毛がないのだろう。感情がわからないようにするためでしょうか。レオナルドは、モナリザをある意味、神のように描きたかったんじゃないだろうか。そんな印象を受けた。

＊ 見かけは穏やかに見えても、内では世の中に対する深い憤り。一人で世から離れ、静かに内がわからないように微笑んで、悲しみをごまかしている。何事にも動じず、静かに耐えている。

＊ モナリザの絵って笑ってはいるけど冷たい感じがしました。背景も暗いし。服が黒いので誰かのお葬式だったのでは。悲しいことがあると無表情になることがあるので、そこを無理に笑ってる顔をしているのかな。と思いました。レオナルドもそんな内に秘めた悲しみを描きたかったのかな。

＊ このモナリザの微笑みは母親が子供を見るときの顔によく似ている。だから、モナリザはレオナルドが自分の母親と重ねつつ描いたのではないかと思う。

＊ 多分身近な（恋人ではない）妹とか母とかの優しさとかを描いたのではないかと思う。背景の自然は母の偉大さや雄大さとかを表しているのかなと思う。

＊ 顔の右半分は笑っているけど、左半分は笑っていない。このことから、喜びと憂いを同時に表現しているんだと思った。たぶん、この女の人は、レオナルドにとって大事な人だと思う。だから、丁寧に様々な工夫をして描いたんだと思った。

＊ 人の微笑みの美しさ、まなざしの優しさを表現したかった。人の笑顔は美しいということを伝えたかったのだと思います。年齢が特定できないように描かれているのは、人は笑うことによって年は関係なく美しいのだと語っていると思います。

＊ 不気味なところもあるが、見ていて少しほっとする顔だと感じた。うれしそうな笑顔も見ていて楽しいが、このような普通の顔が、人間にとって一番安心する顔なのかなと思った。

＊ 何かを見据えているような、じっと見ているような感じがする。視線がまっすぐこちらに注がれていて、なんだか色合いといい表情といい、不思議な感じがする。でも、モナリザは穏やかな、上品な雰囲気で華やかとはいえないけれど、とても知的な感じがする。

＊ これに描かれた女性は、喪服を着ているのに微笑んでいる。そしてこの女性はまだ若い感じがする。だから、レオナルドは若くして大切な人（夫とか）を亡くし、それでもなお苦しみをこらえて微笑む人間

の力強さや、隠しきれない残された者の悲しみを表現したかったんだと思う。（若い女性という死からはものを描くことでより強く表現しようとした）

以上のように、生徒の考えを挙げてみたが、個性的な考えが多いだろうという予想に反して、共通するイメージが多かった。「微笑んでいる表情ではあるが、実は、内心は笑ってはいない。むしろ悲しんでいる。」こういったイメージを思い浮かべた生徒が大半を占めた。

次に、ピカソの「ゲルニカ」について考えて見ることにする。ゲルニカとは、スペインの村の名前で、ナチスドイツ軍の無差別爆撃がおこなわれたという悲惨な情景を思い描いたものである。ここでのポイントは、戦争がテーマであること、そして、色彩は使用せず、モノトーンで描かれたということを考えていく。以下、生徒の文章。

* ゲルニカが伝えていることを、さっと一言で言うと、「戦争反対」だと思います。あの絵は残酷さ、悲しさ、怒りが一つになった絵なのではないでしょうか。ゲルニカに色がついてないのは衝撃を現しているんだと思います。一瞬でうばわれた命、幸せ、それが白黒の色で表現されている。色がないのに絵から激しさが伝わってきます。すごくインパクトのある絵です。一度見たら本当に忘れられません。
* 色がついていないのは、この現実を現実と思いたくなかったからなのではないか。
* 爆撃を受けた人は、姿かたちを変える。みんながバラバラになる。たぶんそういうことが言いたかったんじゃないか。ゆうれいになった人や泣いている人とか、動物のこういう姿はもう二度とあってはいけない。白黒なのは、爆撃を受けたときの人々の悲惨さを表しているのではないか。
* 光はところどころにあるのに逃げ出せない。逃げ出すことを許されていない。人や動物、全てのものが嘆き悲しんでいる。子供を殺された母親、剣が折れ、戦いに敗れた男。色を白黒で表現しているため、光と闇がはっきりわかる。暗い部屋の中で、抵抗も何も出来ず、ただ死を待つだけ。
* 戦争に対する怒り、憎しみにあふれている。あまりに恐ろしく、そこには鮮やかな色さえ存在しない。世界が、自分の時間が止まってしまったような。人々の思いを代弁した作品だ。「こんなことを二度と起こしてはいけない。」というメッセージがこめられていると思う
* ピカソのように絵を壊すことで、より乱れた感じになって、人々の痛みが伝わってくるし、外傷を細かく描かないので、精神的な苦痛が強く伝わってくる。色をつけなかったことも、外傷に注目させないという意味があるのだと思う。
* 初めてこの絵を見たとき、とても楽しい、うれしいといったような絵ではないと思った。ちょっと衝撃的だった。人が逃げているように見え、誰もが悲しそうな表情をしている。白黒で描かれているのも、戦争というものを表すのに適していると思ったんだと思う。
* 「ゲルニカ」の絵の乱雑さは、戦争の激しさ、壊された数多くの物や人の苦しみからきているのではないかと思う。また、なぜモノクロなのか。それは、戦争という概念を表現するために必要な色はなく、色にたよるまでもない。と思ったのだろう。
* 色を塗らなくても十分に残酷さが伝わってくる。人々の苦しみというのが、白黒だということで、よりいっそうひどく感じる。
* 黒と白を使ったのは、それらの色が対称色で、絵がより鮮明に見えると思った。
* 全ての生き物が目に生気が泣く、助けを求めているように見える。そして、「泣く女」の配色とは比べ物にならないほどの暗い配色。これは、ピカソの、世界に対する絶望を描いたものだと思う。ピカソは、その時代の世界に絶望し、助けを求めていたのではないだろうか。
* 授業の中では、「戦争」に対する怒りだと聞いた。実際、この部屋の中には苦しんでいる人や、剣を持って倒れている人がいる。これは戦争に対する怒りである。しかし、この暗い部屋の中には、少し光がさしている。この光は、ピカソの「平和」に対する希望だと思う。戦争の怒りと共に、平和への希望も描いているのだと思った。

どの意見の中にも、「ピカソの反戦の思いを表現したかったんだ。」ということが書いてあり、悲惨な情景を思い浮かべさせるものだった。モノトーンについては、様々な意見があるが、戦争という暗いイメージを表現することに適しているだろうといった意見が多かった。

4．芸術作品が表すもの

最後に、この二人の芸術家について学習し、想像したことについての感想をまとめた。

＊ ピカソの絵もレオナルドの絵も、外見上の印象と裏腹のものを同時に描いているのだと思った。たぶん、その裏腹に描かれているもの、それが内面だと思う。それこそ内面だと思う。それこそ芸術であると感じた。
＊ レオナルドとピカソの絵は、描き方はまるで違う。しかし、内面に秘めた思いは実は同じだったのだろうか。彼らの絵を見てすごいと思うのは簡単だ。しかし本当に伝えたいところは、絵の中に隠された自分の内面だろう。
＊ 感情をそのまま表すのではなく、あえて内面にして逆の感情にそれを込めているようだった。そういうのもあれば、ストレートに表しているのもあった。内面は変化していても、根本的なことは変わっていないと思った。
＊ 人の配置、顔の角度、口角の上がり方、その一つ一つに、なにか意味があるんだろうなあって思う。どこかで「芸術家は子供にかえる」って言葉を聞いたことがある。本当にそうだと思う。難しいことを考えずに、うまく描こうとは思わずに、自由に描けることが芸術家だと思う。
＊ こういう作品たちは、ただ、技術だけで描かれてるんじゃなくて、自分の気持ちやモデルの心の内面、体の内面まで考えているなんて思ってなかった。骨格や筋肉などの構造まで把握していてびっくりだった。ピカソのキュビズムで描かれたものは、すばらしい芸術だと思うようになった。
＊ 画家が描いたものを見るだけではなく、実際に描いてみることで、絵の奥深さを感じた。ピカソの絵は描いていてちょっと不思議な感じがした。絵はただ描くだけじゃなく、一枚一枚にちゃんと表現したいことが一緒に描いてあることがわかった。
＊ 二人は全く似ていないが、共通点は確かにある。他の絵では立ち去るところでも何か訴えかけるものがある二人の作品は見てしまうというのは、やはり、二人の作品は本質・中身を写す力があることを知った。
＊ この二人の共通点は、伝えたいこと、表現したいことがあったということよりも心の中の感情を絵にしたことだと思う。それは人に見せるものではなく、自己満足的なものだったのだ。人々は二人の作品を見て、作者の感情の迫力に圧倒されるのだと思う。
＊ 芸術というのは奥が深いと思った。ピカソの作品の価値は内面にあった。有名な芸術家たちは、技術もすごいが、内面を伝える力は更にすごかったのだと思った。この人たちの新たな物への意欲は計り知れない。

芸術とは何か。この問いに対する答えがこの授業を通して、生徒が自分の意見として考えられるようになってきた。芸術とは、表面的な技術・技法だけではなく、その裏に隠された内面を表現することにある。その作品の中には、作者の様々な思いが詰まっており、それらは、表面には出てこない。その作品の内面にあるからこそ、深い意味を持ち、鑑賞者の興味を引きつける魅力ある作品と呼べるであろう。

表面しかなく、内面がないものは、それは単なる技術に過ぎない。内面に秘められた作者の思いがあるからこそ芸術作品といえるのではないだろうか。そして、その内面を読み取る力が、美術作品における読解力であり、基礎力であるのではないかと考える。
作品の前に立ち、静かにその作品の中に込められた思いを探っていく。作者は何を思って制作したのだろう。
何を伝えたかったのだろう。様々な想像を心の中で思いめぐらせる。この行為は、自分以外の他者を思う気持ちにも共通することなのではないだろうか。

教授資料

「やさしい美術解剖学」J・シェパード著　マール社　1992年
「作家シリーズ　創造の原点　限りなき挑戦」NHKビデオ教材　日本文教出版　1997年